

日本語の定性標示

「観念的照応」に存在する「裸名詞」と「あの+NP」の 定性の性質の違いをめぐって

モスタファ ヤスミン (名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程修了生)

要旨

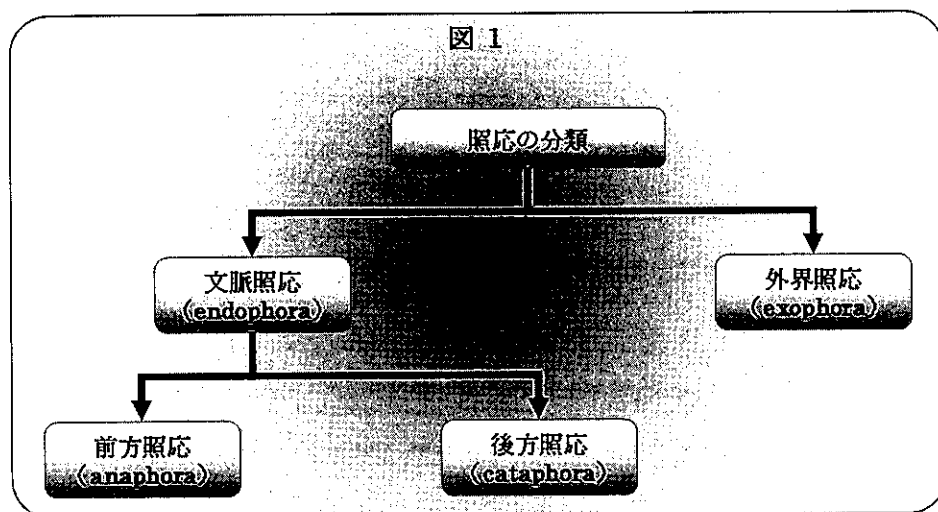
「定性」の概念は、名詞句に冠詞が付いているか否かということに結び付けられるのが、最近まで一般的な考えであったため、日本語のような統語的な定性マーカーがない言語については、「定性」の研究がそれほど進んでいないのが現状である。このような言語においても、冠詞がないとはいえ、定情報・不定情報が、何らかの方法で表されるのは言うまでもない。日本語には、定情報を表すものとして機能する言語要素があるということを明らかにすることが本稿の目的である。これを立証するために、体系的な定性標示を持つ、日本語と語族が異なるアラビア語を参照し、例文を分析することによって、アラビア語の定性標示に対応する日本語の言語表現を明らかにする。「定性」においては、話し手と聞き手に共通の知識があることが原則的な条件であるため、照応表現の一つである「観念的照応」を中心に研究を進めていく。従来の研究では、「観念的照応」といえば、指示詞「ア」の機能とされてきたが、本稿では、「裸名詞」も「あの+NP」も「観念的照応」として機能するという新たな見解を提案する。さらに、「裸名詞」、「あの+NP」のそれぞれによる「定性」の性質の違いを考察し、明らかにする。「裸名詞」は、過去において共有され、発話時点まで残っているような知識である一方、「あの+NP」の場合は、既に終了している出来事について、「あの+NP」を用いることによって、当該の出来事へのアクセスが可能になる。それぞれの性質について以下で詳細に考察する。

1. 「文脈的照応」と「外界照応」について

山梨 (1992) は、「照応関係」にある表現は、「文脈的照応」と「外界照応」に分類されると述べている¹。「外界照応」について山梨は、その先行詞が言語文脈の中には認められず、問題の発話における言語外の場面の中に認められると述べている。

(1) 僕がこの前買った本はどこかなあ。昨日は確かにここに置いてあったはずだけど。(山梨 1992)

山梨 (1992) は照応の分類を以下の図1でまとめている。



Halliday and Hasan (1976) の照応の説明に基づいた山梨のこの分類は、「外界照応」には、「現場指示」に相当するものしか存在しないということの意味する。しかし本稿では、「外界照応」はより包括的な概念であり、その中に「現場指示」と「文脈指示のア」が含まれていると考える。両者の指示対象が存在する領域は言語文脈内では決定されず、言語文脈外である実世界の中で決定されるのである。従って、テキスト内の結束性には関わらない。Halliday and Hasan (1976:59)では、「Exophoric reference is not textually cohesive」とされています。「文脈指示のア」の例文は以下の通りです。

(2) あのレストランはおいしかった！

¹ 「文脈的照応」の性質やそれに関わる分析の詳細は、モスタファ ヤスミーナ (2013) を参照。

日本語の定性標示「観念的照応」に存在する「裸名詞」と「あの+NP」の定性の性質の違いをめぐって

「現場指示」が、発話の現場に存在する特定の指示対象を指示するのと同様に、いわゆる「文脈指示のア」も、言語文脈に依存せず、過去の経験や百科事典的知識に基づいて、言語文脈外に存在する実際の特定の人物や物事、実際に起きた出来事や知識を指示する。「現場指示」において、話し手が指で聞き手の注目を指示対象の方向に向かせるのと同様に、「文脈指示のア」においても、話し手は聞き手の注目を、過去に二人ともが経験したことや場所などに向けさせるために、その対象を「ア」で指示する。このように考えると、「ア」はあたかも昔の特定の出来事を指示しているかのように考えられる。話し手と聞き手が、ある事柄について終始「ア」で指し続けるということは、二人の知識の中から同一の対象が取り出され、その姿を目の前に見ているかのように語り合っていると考える。以上より、本稿では、「文脈指示のア」を「観念的照応」と呼び、「観念的照応」を中心に調査を行い、それによる「定性」の標示を考察する²。

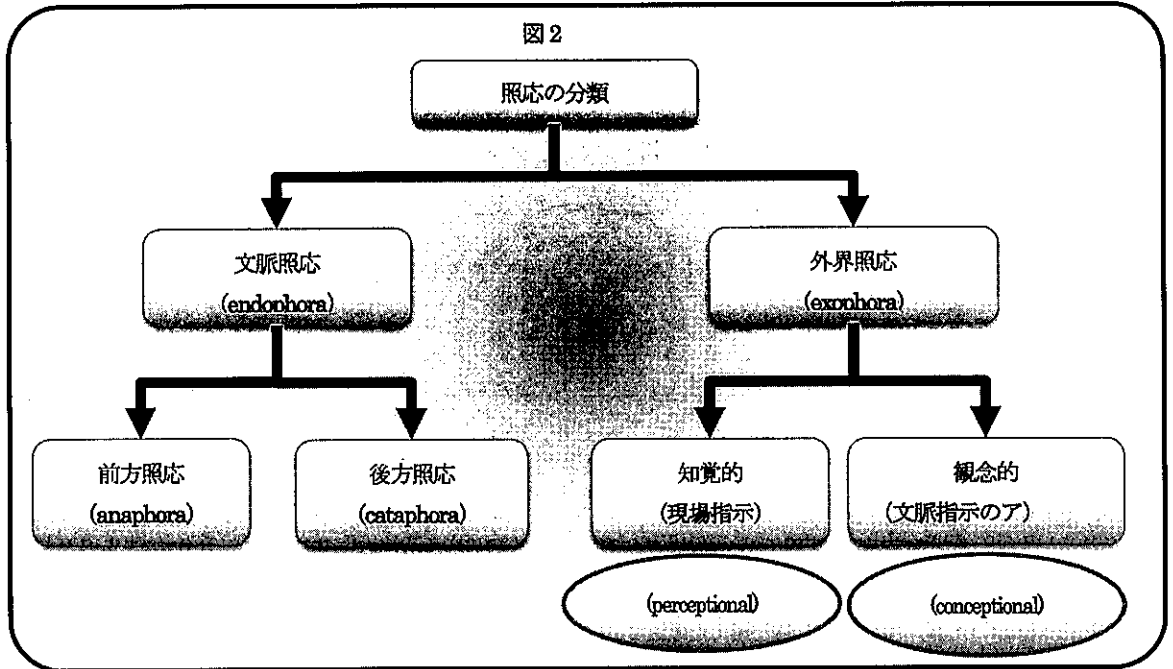
以上の提案に基づき、山梨の図1を補足し、以下の図2を示す。

² 国立国語研究所(1981)では、観念対象指示の場合にも「コ」「ソ」「ア」の全てが現れ、「コ」と「ア」は、その正体が自分に良く分かっている場合にしか使用されないのに対し、「ソ」ははっきりと正体が分かっているものに使用されると述べている。

① A: 僕が行っている英会話学院にハワイの先生がいるんだけど、その先生の授業とても面白いんだ。

B: その先生、どんな先生なの？

しかし、本稿では「文脈的照応」と「観念的照応」を区別して扱い、①の「ソ」のこのような用法は、「文脈的照応」に属しており、「文脈指示のア」のみが「観念的照応」に属していると考えられる。



2. 「外界照応」に属する「観念的照応」の用法について

本稿では、定性標示を体系的に持つ言語であるアラビア語を参照して分析を行うことが目的であるため、アラビア語の限定辞「al」の分類に倣って、日本語の指示詞を分類する。

2.1. アラビア語の限定辞「al」について

限定辞「al」には「照応的な (alṣahdiyya) 用法」と「総称的な (alḡinsīyya) 用法」がある。「照応的な用法」は更に、「文脈的照応 (alṣahdu ḍḍikri:)」 「観念的照応 (alṣahdu ḍḍihni:)」 「知覚的照応 (alṣahdu l-huḍuri:)」の三つに分けられる。本稿では、アラビア語の「観念的照応 (alṣahdu ḍḍihni:)」のみを扱い、その性質を明らかにした上で、日本語に適用する。

2.1.1. 観念的照応 (alṣahdu ḍḍihni:) の概要

この種の照応は文脈的照応とは異なり、「al」を伴った名詞句「al+名詞句」の指示対象は言語文脈のレベルを超え、実世界に存在するものとして同定される。この種の名詞句の指示対象は話し手と聞き手の間で発話時点の前から限定されており、既知の情報として脳内に蓄えられている。その指示対象は、話し手と聞き手の間に共有されている過去の経験や出来事を含む (Hassan 1974)。

「観念的照応」においては、第一発話から名詞に「al-」が付いており、定記述を表すという点で、文脈的照応とは性質が異なっている³。つまり、Hawkins (1978) が指摘した「第一発話の定記述 (first-mention definite description)」に相当する⁴。

日本語について考えてみると、このような照応の性質を持つ言語表現は、指示詞「ア」であると考えられる。久野 (1973b) は、アー系列について、「その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる」と述べている⁵。つまり、アラビア語の「観念的照応」、いわゆる、話し手と聞き手の間に共有されている情報を指す機能を持つものは、日本語では指示詞「ア」であると思われる。

(3) a. alyawma ðahabtu ila **tilka** l-madrasat-i

today I went to that DEF-school-GEN

b. Today I went to **that** / **the** school.

c. 今日 **は** **あの** 学校に行った。

しかし、例 (3a) を見ると、「al-+名詞句」の前に「tilka」という指示詞が使用されている。アラビア語の指示詞の性質から考えると、遠称の指示詞「ða:lika (MAS.SING.男性単数)、tilka (FEM.SING.女性単数)」における形態素「l」は、指示対象が遠くにあることを意味し、話し手の現在の意識に存在しないことを指示する時によく使われる (Alsaiyouti 1998: 249)。更に、Jumua (2002: 142-143) は、指示詞は指示対象を唯一的に脳に想起するのに使用されると述べている。つまり、指示詞は、話し手の現在の意識には存在しないが、長期記憶には保存されている対象が、場面に応じて、現在進行中の会話に一時的に想起されるのに使用される。この例から、日本語の「あの+名詞句」は、アラビア語の「指示詞+al-+名詞句」に対応するということが分かる。

³ 「文脈的照応」についての詳細は、モスタファ ヤスミン (2013) を参照。

⁴ 庵 (1994) は、「文脈的照応」による限定情報を「定情報」、「観念的照応」による定情報を「論理的-デフォルト (logical-defaultive definite 'LDD) 」と名づけている。

⁵ 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6巻4号 pp.73 より引用。

ところが、アラビア語では、「観念的照応」において、「al+名詞句」の前に指示詞が常に置かれるというわけではない。むしろ、場面や条件がなければ、指示詞を使わずに「al+名詞句」のみが用いられる方が一般的である。以下で、「al+名詞句」のみを用いた例文をいくつか考え、それに対応する日本語の言語表現を考察する。

(4) *šahabtu ila Hkulliyat-i wa qa:balu ʔas'diqa:ʔi:*

i went to DEF-school-GEN and imet my friends

(i) 学校に行って、友達に会った

(ii) *あの学校に行って、友達に会った⁶

(5) *haɖara l-ʔusta:ð-u*

Came DEF-teacher-NOM

(i) 先生が来た

(ii) *あの先生が来た

(6) *ʔakmaltu qira:ʔata l-qisʔʔat-i*

i finished reading DEF-story-GEN

(i) 小説を読み終わった

(ii) *あの小説を読み終わった

例文(4)、(5)、(6)のそれぞれに現れている「l-kulliyat-i」、「l-ʔusta:ð-u」、「l-qisʔʔat-i」は外界的照応を表す「al+名詞句」であり、それらは、発話時点の前から話し手と聞き手の間の共通の知識である特定かつ限定可能な人物や場所などを表している。これらの限定性は、発話者の間で過去に設定された共有の出来事や経験に基づいて発生しており、この共有の出来事や経験に注目を向けさせるのは、この「al-」であって、他の単語ではない。

⁶ 「*」は非文法的ではないが、意味が異なる。後ほど、詳細に考察する。

日本語の定性標示「観念的照応」に存在する「裸名詞」と「あの+NP」の定性の性質の違いをめぐって

しかし、上記の例を見ると、アラビア語の各文に対して二通りの解釈が可能である。(i)のように「裸名詞」を使った解釈と、(ii)のように「あの+NP」を使った解釈で、むしろ、(i)の解釈のほうが一般的である。ほとんどの先行研究では、「観念的照応」が取り上げられる際に、指示詞「ア」しか使われないとされている(李(1994)、庵(1994, 1999))⁷。また、東郷(2000)は、「ア系指示詞は、共有知識領域に存在する対象をさす。また共有知識領域に存在する対象をさすことができるのは、ア系に限られる」と述べている。本稿では従来の見解を発展させ、「観念的照応」には、「裸名詞」と「あの+NP」という二種類があると提案する。上記の例文の日本語の各文によって示されている共有の人物や事物が存在する領域は、どのような性質を持つのであろうか。また、それらの意味の違いは何か、どのようにして日本語の定性に結び付けられるのかということについて、以下で詳細に論考する。

2.2. 裸名詞が持つ様々な意味

裸名詞は大まかに「定名詞」「不定名詞」「総称名詞」のそれぞれを表すことができる⁸。以下の例は、同じ裸名詞「先生」が三通りの用法で現れることができることを示す。

(7) (同じ学科の同級生の会話)

A: その辞書、どこから持ってきたの?

B: 先生に貸していただいたんだよ。(定名詞)

(8) A: 来月から新しい先生が来るんだって

⁷ 「観念的照応」は「観念対象指示」と呼ばれることもある。

⁸ 庵(1994)は、「観念指示」と「非観念指示」を大別している。「観念指示」には、「あの+NP」(i)があるのに対し、「非観念指示」には、「総称指示」(ii)、「唯一指示」(iii)、「デフォルト的指示」(iv)、「連想的指示」(v)があるとしている。

(i) あの試合は悔しかったね。

(ii) 馬は良く動く。

(iii) 太陽が西に沈んだ。

(iv) 首相が辞めた。

(v) フレッドが教室で面白い本の話をしていた。彼は著者と仲がいい。

裸名詞は、「定名詞」「不定名詞」に加え、庵の「非観念指示」のカテゴリーに入る四つの種類の名詞も表すことができる。しかし、本稿では、このような分類は扱わず、上記のように大まかに「定名詞」「不定名詞」「総称名詞」に分けるにとどめる。

B: えっ、どんな先生?どの科目教えてくれるの? (不定名詞)

(9) A: 先生って尊敬すべきものだね!

B: そうだね!本当に大変な職業だよね! (総称名詞)

例 (7) では、同じ学科の二人の同級生が教えてもらっている先生について話しており、その先生のことは、話し手・聞き手が共によく知っており、既知の情報として会話に登場している。つまり、先生は会話以前から共有知識の領域に存在している。一方、例 (8) では、話し手と聞き手が今まで知らなかった新しい先生について話している。同じ裸名詞「先生」でありながら、話し手と聞き手の間の共有知識の領域に存在しない未知の人物であり、新規の情報として登場している裸名詞である。Wallace (1976) は (7) のような既知の情報を “already activated” (活性化済み)、(8) のような未知の情報を “newly activated” (新規に活性化された) とそれぞれ呼んでいる。例 (9) では、話し手と聞き手が「先生」という性質を持つ一般的な人物について話している。ここに現れている「先生」は既知の対象を指すこともなく、未知の対象を指すこともない。それは、「先生」というカテゴリーに入る全ての人物を指す「総称的な用法」(Generic) と呼ばれる⁹。

これらの三種類の裸名詞が、どのような状況の下で使い分けられるかということは、本稿の目的ではないため、上記の紹介にとどめる。

上述したように、本稿では、「あの+NP」に加え、「裸名詞」も「観念的照応」として機能することができるといことを提案する。この「裸名詞」が指す対象は二通りの用法によって同定される。一つ目は、実世界から具体的な対象を特定する用法である(例7)。この用法は、話し手と聞き手の共有の知識が必須条件となる。二つ目は、具体的なものではなく、総称的・百科事典的情報に基づいた用法である(例9)。この用法では、話し手と聞き手の共有の知識は必須条件ではない。本稿では、「あの+NP」の使用条件と同様の具体的な対象を指示する「裸名詞」の一つ目の用法のみを扱う。

2.3. 「あの+NP」と「裸名詞」が表す定性の性質の違い

2.3.1. 先行研究

⁹ある名詞の「総称的」「非総称的」という性質は、名詞の種類によって決まるものではなく、名詞とその述語との関係で決まるものである。(Wallace 1970: 189)

日本語の定性標示「観念的照応」に存在する「裸名詞」と「あの+NP」の定性の性質の違いをめぐって

ア系列指示に関する研究は従来より幅広くなされており、「発話時に話し手と聞き手の間の共有の知識を指す役割を持つものは「あの」である」というようなものが一般的な定義である(久野 1973、東郷 2000、李 1994、金水 1988、堀口 2004)。一方、定情報を提供するものとして機能することができる「裸名詞」に触れた研究はそれほどなく、「定性」の面を扱った研究はほとんどない。本稿では、「裸名詞」に触れている先行研究を参考にしながら、「観念的照応」に対応する「あの+NP」と「裸名詞」による定性の性質の違いを明らかにする。

(Lyons 1999: 53) は以下のように述べている。

“The appearance or omission of the article cannot be fully predicted, it is largely determined by the accessibility of the referent. If the previous mention of a referent is considerably far back in the discourse, it is less easily activated by the hearer; and if other, similar, referents have occurred in the intervening discourse, these can interfere with the hearer’s identification of the intended referent. In such circumstances the speaker tends to use the “heavier coding” of an article-marked noun phrase as a way of alerting the hearer to the need to find the referent and thus helping him in the task. In other words, a bare noun phrase is used when the referent is judged to be easy to access, and a definite-marked noun phrase when more effort seems to be required.”

また、指示対象の同定により努力が必要な場合には、代名詞が使用される。冠詞または代名詞は、聞き手の注目を現在の状況よりも、先行の談話に導くと述べている。

Dik (1981: 128) は、“A linguistic expression may also have the effect of making the addressee aware of some piece of information *p* which he did possess, but was not thinking of at the given moment.”と述べている。

吉田 (2005) では、「裸名詞」は、談話理解における話題の継続性を担う役割を持つものとして考えられており、「裸名詞が情報を維持するための認知的に最も単純で安定した形式であり、話題の整合性を形成するのに好都合である」と述べられている。

また、話題へのアクセスを可能にする要因について、Givon (1983:11) は次のことを言っている。

I ある知識や情報が脳に登録されてからどのぐらい経っているか。

ある話題がもともと定情報ではあったが、しばらくアクセスされていない状態にあるとする。しばらくたった後、再びその話題にアクセスしようとしても、話題の同定が難しくなる。

II 他の話題に妨げられる可能性がある。

意味論的に似ているいくつかの話題が登録されていれば、特定の話題を同定することが困難な作業になる。

(Chafe 1976)

「旧知識」は、発話時に聞き手の意識に存在すると話し手が想定する知識のことである。話し手は、聞き手に向かって話をする際に、聞き手の長期記憶に蓄えられている知識よりも、聞き手の脳の一時的な状態を考慮して話を進める。つまり、ある知識が聞き手の長期記憶に存在するといっても、「旧知識」として扱われるべきであるとは限らない。更に、話し手は、聞き手の意識に存在すると想定している知識のみならず、聞き手に正確に指示対象を同定する能力があるということについても考慮しながら、話をすべきである。話し手は、ある対象が聞き手の現在の意識に存在しないと判断した際に、その対象を「旧知識」として扱うことをやめるべきである。そこで、Halliday (1967) が提案した「復元可能性 (recoverability)」の概念が適用される。「復元可能性」とは、聞き手がある対象について考えなくなったとしても、つまり「旧知識」として扱えなくなったが、記憶中でその対象へのアクセスがまだ可能であり、更に、現在の意識に復元することが可能であるという概念である。以下の例を参照したい。

(10) a. alyawma čahabtu ila ĩmadrasat-i

today i went to DEF-school-GEN

b. Today I went to (φ) school.

c. 今日 (φ) 学校に行った。

(11) a. alyawma čahabtu ila tilka ĩmadrasat-i

today i went to that DEF-school-GEN

日本語の定性標示「観念的照応」に存在する「裸名詞」と「あの+NP」の定性の性質の違いをめぐって

b. Today I went to **that / the** school.

c. 今日はあの学校に行った。

例 (10a) の「l-madrasat-i」が指す意味を考えると、アラビア語では次の解釈が一般的である。話し手は、現在、学生であり、毎日学校に通っている状態にある。聞き手が（いるとすれば）、話し手に「(ma:ða: faʕalta lyawma?) 今日は何をしたの?」と質問し、話し手が (10a) のような答えをしたとしたら、話し手が発言した「al+名詞句」(l-madrasat-i) について、聞き手は「話し手が今通っている学校のことだ」と容易に判断することができる。(10b)、(10c) も同様の解釈をもたらす。(10b) では、例えば、父が子供に対して、(what did you do today?) と質問して、(today I went to school) というような返事をもたらしたとすると、父は子供が行った学校が毎日通っている学校のことだとすぐに解釈することができる。(10c) も同じ状況で、毎日通っている学校に言及したい時は、「裸名詞」で指示するのが一般的である。

一方、(11a, b, c) は (10a, b, c) と異なる解釈をもたらす。(11a) で使用されている指示詞「tilka」を名詞の前に置くことによって、話し手は、普段とは異なる学校を示し、聞き手の注目を引きたい、ということになる。

以上のことから考えると、「裸名詞」及び「あの+NP」による定性の性質の違いについて、次のような仮説を立てることができる。

仮説:

- i) 「裸名詞」は、話し手にとっても聞き手にとっても脳の中に候補者が一つしか存在しないことを意味する。その候補者は、聞き手が容易に唯一的に同定することができる。時の経過と共に、登録から消えることもなく、他と混同することもない。過去に登録されていても、話し手の現在の状況との関わりがまだ続いているものに対して用いられる。(無標)
- ii) 「あの+NP」は、話し手と聞き手の間の共通の経験や情報に基づくものではあるが、意味的に性質が類似している候補者がいくつかある中で、場面に応じて、一つに絞りたい場合に用いられる。「裸名詞」とは

異なり、ある程度の努力をしなければ、指示対象の唯一性または特定性の度合いが低くなる。過去に登録された一時的なエピソードとして同定される対象に用いられる。(有標)

2.3.2. 考察

本節では、上述の仮説を立証するために、いくつかの例文を考察していく。

(12 も 13 も娘がお母さんに授業について話している場面)

(12) a. laqad uliyiat al-moha:darat-u alyaum

was cancelled DEF-class-NOM today

b. 今日(φ) 授業がキャンセルされた。

(13) a. laqad uliyiat tilka al-moha:darat-u alyaum

was cancelled that DEF-class-NOM today

b. 今日(φ) はあの授業がキャンセルされた。

(12a, b) では、娘がお母さんに、毎日大学で受けている授業が今日キャンセルされたことを知らせている。

「授業」を「裸名詞」で発言することによって、話し手も聞き手も指している授業は、毎日大学で受けている授業のことだという解釈になる。

一方、(13a, b) には、そのような解釈はない。例えば、娘が自分の専門と違う分野で、ある日特別な授業を受けるはずだった。そのことについて、前もって母親に知らせたとする。当日その授業に参加するつもりで大学に行ったが、キャンセルされたことが分かって、それをお母さんに知らせたとする。そうすると、「tilka」「あの」を名詞の前に置くことによって、「今日はいつもの授業ではなく、この間話した特別な授業がキャンセルされた」という意味になる。従って、お母さんの注目は、いつもの授業から、他の授業(娘に教えてもらった授業)に引きつけられることが期待される。すなわち、「あの+NP」は、聞き手の脳に対象を喚起させ、性質が類似している対象がいくつかある中で、話題に当てはまる特定の対象の方向に導く機能があると言える。

(14) A:きのう、買い物してたら、先生に会ったよ

B:へえ！先生も買い物してたの？

(15) A:きのう、買い物してたら、あの先生に会ったよ

B:あの先生って？

A:先週ゲスト教師として来てくれた先生だよ

B:ああ、あの先生か

例(14)で、話し手が言及した先生は、現在AにもBにも関わりのある先生であり、学校でこの二人に教えている先生として認識されている。指示対象の同定スペースは、発話が進行中のスペースとなる。一方、(15)では、Aが指示しようとしていた先生は、AもBも通っている学校で通常教えている先生ではなく、一時的にこの学校を訪れたことがある人物のことである。確かに、この人物は、AとBの間で共通の知識として脳内に登録されているが、「あの+NP」は、通常の先生ではなく、他の共通の知識として登録されている人物を探す引き金になる。この場合には、指示対象の同定スペースは、現在ではなく過去にあるということになる。しかし、聞き手の知識の中で、話題の対象に当てはまる人物が何人もいて、特定の者を同定することができなかったら、(15b)のような返事をすることもある。それは、「裸名詞」の場合には起きない混乱である。ここで、Halliday(1967)が提案した「復元可能性(recoverability)」の概念が適用される。つまり、(15)の先生は、過去においてAとBの間の共通知識として登録されていたが、登録された時からしばらく話題になっていないため、焦点から外れてしまった。それからしばらく経過した後、再び談話に復元するために、過去の出来事を指す役割がある「あの」が用いられているのである。

(16) A:去年、この時期に学校で火事があったんだよね！

B:もう一年経っちゃったの？あつという間だね。

例(16)では、事故の発生時と会話の時間軸が異なっているが、主題の「学校」は、話し手と聞き手との関わりが現在に至るまで継続的に続いているため、「裸名詞」で指示されている。

(17) 子：お母さん、あの仕事やめてよかったね！毎日遅くて大変だったでしょう！

母：ホントよかったね。今の仕事はもっと余裕あるし！

(17)では、母親は以前ある仕事をしていたが、今はそれを辞めて他の仕事をしている状態にある。以前の仕事は、過去の一時的な出来事であり、現在まで継続していない。現在の仕事から過去の仕事へ視点を転換し、それへのアクセスを可能にするために、「あの+NP」が使用されている。つまり、指示対象の同定スペースは、現在ではなく、過去であるということになる。

以上の考察から考えると、日本語の「観念的照応」においては、「裸名詞」は、時間の経過に関わらず「主題の継続性」を表すのに対し、「あの+NP」は「主題の転換」を表す。「裸名詞」は、継続的なエピソードを指すのに用いられ、「あの+NP」は過去における局所的なエピソードを指すのに用いられる。「裸名詞」の場合は、発話が発せられるスペースが指示対象の同定スペースと同じものになるが、「あの+NP」の場合は、発話時より前の時空間が指示対象の同定スペースとなる。「裸名詞」は、その初登録が過去にあったとしても、現在でも関わりのあるものとして確認される対象を指すのに用いられるのに対し、「あの+NP」は、過去の経験の回復(recoverability)、過去の知識へのアクセスを可能にする役割があると結論付けられる。

3. 結び

本稿では、「観念的照応」について考察した。「観念的照応」は、その指示対象を文脈外に持つので、これを「外界照応」の一つとして扱った。また、アラビア語との比較対照を通じて、日本語の「観念的照応」の機能を有する表現を明らかにした。それは「あの+NP」と「裸名詞」である。「あの+NP」には、場面の状況次第で、いくつかの用法があることは確かであるが、今回は話し手と聞き手の共通知識が原則である「定性」を扱うことが目的だったため、話し手と聞き手の共通知識を条件とする「あの+NP」の用法を「裸名詞」と対照し考察を行った。データの分析を通して、双方とも話し手と聞き手の共通知識を表すことができるが、この知識に違いがあることが明らかになった。「裸名詞」は、過去において共有され、発話時点ま

日本語の定性標示「観念的照応」に存在する「裸名詞」と「あの+NP」の定性の性質の違いをめぐって

で残っているような知識である。一方、「あの+NP」における知識は会話時点では既に想起されなくなっているものである。既に終了している出来事について、「あの+NP」を用いることによって、当該の出来事へのアクセスが可能になり、忘れられた情報が復元されることになる。

「裸名詞」、「あの+NP」のいずれも、話者同士の共通知識が必須であるため、これらの形式を日本語の「定性標示」と決定することができ、前者が無標、後者が有標の形式である。

参考文献

- 1 国立国語研究所 (1981) 『日本語の指示詞』大蔵省印刷局
- 2 功雄庵 (1994) 「定性に関する一考察：定情報という概念について」現代日本語研究 1 巻 pp.40-56
- 3 功雄庵 (1999) 「ア系統指示詞の用法に関する一考察」現代日本語研究 6 巻 pp.100-114
- 4 山梨正明 (1992) 『推論と照応』くろしお出版
- 5 吉田悦子 (2005) 「談話理解モデルからみた日本語名詞句の解釈について」人文論業：三重大学人文学部文化科学研究紀要 22 巻 pp.129-140
- 6 李長波 (1994) 「指示詞の機能と「コ・ソ・ア」の選択関係について」京都大学文学部国語学国文学研究室 63 巻 5 号 pp.37-54
- 7 Assaiyouty, Allmamu Jalal Ekdin Sabdul Rahman Ibn Abi Bakr (1998), *Hamfi Lhawa: mi' fi Sharhi Jam'i Ljawa: mi'*. Dar Alkutub AKilmiyya
- 8 Chafe, Wallace L. (1970), *Meaning and the Structure of Language*. The University of Chicago Press
- 9 Chafe, Wallace L. (1976), *Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of view*. In Subject and Topic, Charles N. Li (ed.), Academic Press pp.25-55
- 10 Dik, Simon C. (1981), *Functional Grammar*. Dordrecht, Holland; Cinnaminson, U.S.A. : Foris
- 11 Givon, T. (1983), *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*. John Benjamins
- 12 Halliday, M. A. K. & Hasan, Ruqaiya (1976), *Cohesion in English*. Longman Group Limited.
- 13 Hassan, Abbas (1974), *Alna'w Alwa: fi'*. Dar Almafariif
- 14 Heine, Julia E. (1998), *Definiteness Predictions for Japanese Noun Phrases*. Annual Meeting of the ACL. Proceedings of the 36th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics and 17th International Conference on Computational Linguistics – Volume 1

- 15 Jumua Hussein (2002), *Fi: Jama'iyati Ikalima. Itiha:di Ikutta:bi Karabi*
- 16 Lyons, Christopher (1999), *Definiteness*. Cambridge University Press